



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小林敬著「存在の光を求めて」 : ガブリエル・マルセルの宗教哲学の研究(I)
Author(s)	杉内, 峰彦
Citation	基督教学, 33, 35-39
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46603
Type	other
File Information	33_35-39.pdf



小林 敬著『存在の光を求めて』

——ガブリエル・マルセルの
宗教哲学の研究(Ⅰ)——

杉 内 峰 彦

同じ年(一八八九年)に生まれたウイトゲンシュタインやハイデガーに比べて、マルセルは今日ほとんど顧みられることのない哲学者である。勿論、現代フランス哲学を扱った書物の中で彼の名前を載せていないものはないであろう。「キリスト教的実存主義」は戦後のフランスを代表する思想であったし、メルロ・ポンティ、レヴィナス、リクール等に与えたマルセルの影響は無視し得ないものだからである。けれども、メルロ・ポンティやレヴィナスは言うまでもなく、マルセルを「私の数少ない師の一人」と述べているリクールに於いても、より重要

な影響はフッサールからのものである。今日の一般的傾向からすれば、マルセルは〈過去〉哲学者になりつつあるのである。

従って、今頃何でマルセルなのか、しかもドゥルーズやデリグといった現代フランス哲学界の大御所たちが「形而上学の脱構築」やら「反哲学」とかを標榜しているこのご時勢に!というのが本書を手にした時の最初の印象であった。けれども、本書はその様なニーチェ・ハイデガー主義との対決やマルセル哲学の復権を意図したものではない。かつてマルセルとの「(我)汝的(な)出会い」(Ⅵ頁)を経験し、「せめて誰かがこの人の事を語り伝えてゆかねばなるまいという思い」(Ⅷ頁)を抱き続けて来た著者の目指していることは、「神を信じる世界と神を知らない世界との境界に立つた」(一八二頁)マルセルの立場を、今日のキリスト者に求められている哲学的立場として示すことにある。だが、著者が「前神学的な哲学」(六七頁)と名づけているこの立場が果たして我々の採るべき立場なのかどうか、評者の見解は否定的なのである。もっとも、著者のマルセル理解に敢えて異論を唱える

つもりはない。彼の哲学は「キリスト教を直接には弁証しようとしなないキリスト教哲学」(五四頁)であり、彼の「啓示信仰そのものに対する哲学的反省の關係的位置づけ」はネオ・トミストたちと「共通した傾向を有しつつも必ずしも全く同じではない」(一一〇頁)のである。そしてその違いを「マルセルにおいて両者は、相補的乃至は相互呼応的であつた」(二四九頁)と見ることも出来なくはない。だが、この様な特徴づけは信仰と理性、神学と哲学とを互いに補完し合う「二つの契機」と見做す伝統的な考えの上には成立しない。おそらく著者は、「二つの秩序を形式的に区別しつつ、キリスト教の啓示を理性に不可欠な補助と考ふる全ての哲学をキリスト教哲学と呼ぶ」というジルソンの定義を自明なものと考えているのである。著者の主張していることは、この「二つの秩序」をマルセルの様に「相補的乃至は相互呼応的」に捉えなければならぬということに過ぎない。だが、そもそも信と知の区別は、信仰者にとってしか意味をもたない区別なのではないか。信仰をもたない者にとって、信仰など単なる思い込みであるか全くの虚妄でしか

なく、真に存在するとは言えないものだからである。(多くの論者たちが指摘している様に、何の信も前提しない様な知は存在しない。けれども、その信をここで問題にしている信仰と同一視することは出来ない。)従つて、マルセルが「かつての彼同様の未信徒とともにあらんとするため」に「イエス・キリストの神への信仰そのものよりはむしろ『絶対の汝』の理解により重点を置いた省察をあえて回心後も継続した」としても、「カミュやサルトルがついに理解も出来ず信する事も得なかつた」(六七―六八頁)のは止むを得ないことなのである。

評者は信と知を相容れないものと考えているわけではないし、マルセルの思索に意味がないと考えているわけでもない。ただ、信と知を補完し合つたり、呼応し合つたりする二つの契機と見做す立場には問題があり、その結果、今日ではほとんど説得力を失つていと考へているのである。だが、この点を論じる前に本書の内容を紹介しておくのが筋というものであろう。

第一部 実存から信仰へ

第一篇 カミュの無神論について

第二篇 サルトルの無神論について

第三篇 マルセルの回心について

第二部 信仰と哲学

第一篇 「問題」と「神秘」

第二篇 「神の存在証明」を超えて

第三部 「前神学」的な宗教哲学

第一篇 パスカルとマルセル

第二篇 マルセルとアバーバー

第三篇 マルセルとプロテスタント

第四部 存在の光を求めて

第一篇 「不安」と信仰

第二篇 「苦悩」と「不安」

第一部から第三部までは、研究（I）と記された本書の根幹を成す部分である。著者の意図はマルセルが「信者と未信者との中線上に身を置く哲学者」という意味で用いた「敷居の哲学者」という概念に基づいて、マルセル哲学の特質を神学的でもなく非神学的でもない「前神

学的」な哲学として捉えることにある。「彼は『非神学的な』哲学者にとどまるには、あまりにも『神によって』捉えられていたが、『神学的な』方法に移るには、あまりにも『教会・教派によって』捉えられていなかったのである。」（二〇七頁）という言葉は、著者のマルセル像を端的に表現している。第一部では、カミュやサルトルの神とマルセルの受け容れた「絶対の汝」としての神を対比させながら、回心後にも常に「神に呼ばれている未信徒かつ求道者としての精神」（七一頁）を保ち続けたマルセルの「敷居の立場」が強調されている。（些細なことではあるが、著者は「マルセルは齡四十代に到って忽然と回心した」（四頁）と表現しているが、如何なものか。彼の受洗は三十九歳の時である。）第二部では、「問題―神秘」というマルセル哲学の根本概念の考察を通して、当時のカトリックの主流であったネオ・トミズムとマルセルとの理性の位置づけの違いが明らかにされている。「彼の思想は、神の存在の『証明』には依拠しない。それはそもそも神の存在が『証明』可能な『問題』の次元を超えた、愛に基づく信仰にかかわる『神秘』だからである。」

(一一九頁) また「彼は『恩寵』が、理性による『自然』の觀念化によってではなく、むしろ『自然』あるいは被造世界のただ中に実存する主体の知を超えた存在参与によってこそ、求められ信じられるものである事を強調した」(一二二頁)のである。第三部では、このマルセルに固有な「前・神学的キリスト教哲学」が「彼の思想と共通する内容を異なる方法―むしろ『神学的』方法―を取つて述べた」(Ⅸ頁)パスカルとブーバーに対比されつつ論じられている。もともと「宗教的な哲学」であるマルセル哲学を扱う本書の副題に「マルセルの宗教哲学」とあるのは、第三部までが専らマルセルの「神」をめぐって展開されているためであろう。これに対して最後の第四部は、マルセルの「不安」概念の検討にあてられている。この部分は、マルセルの「具体的哲学」全般にわたる研究の最初の章を成すものであると同時に、本書の最後に位置するにふさわしいものとなっている。著者はマルセルの不安論の中に、「究極的な『存在の神秘』への参与」が「我―汝」的にしか、即ち超人格的な「絶対の汝」としての啓示を信じる所にしか、可能とされない」ことを、

更に「ここにも又、かかる参与を探る形而上学的反省と参与の帰結たる宗教的信仰との相補的連関を見る事ができる」(二五〇頁)ことを再確認しているからである。また「彼にとって実存の反射から存在の光の本質を求めてゆく哲学者の歩みも、ただ光そのものの照射たる宗教的啓示を受容する事によってしか究極的に完成されるとは考えられないものだった。」(二五一頁)という言葉には、本書の表題と同様、マルセルの如く常に「旅人」たらんとしている著者の真摯な姿勢が表現されている。

だが、常に「旅人」でしかなかった評者は、先に述べた様に著者の考へには反対なのである。それは、この最終章にも強く打ち出されている「恩寵主義的傾向の顕著な」(七四頁)マルセル解釈のためでもある。マルセルによれば、我々は既に「存在の光」の内にいるのであり、それを彼方に求めるべきではないのではないか。けれども今は、前に触れた問題に戻らなければならない。信と知をどの様に考えればよいかの問題である。評者の考へを大雑把に言えば、信と知という「二つの秩序」とは、「アヒルーウサギ」の様な反転図形を見る見方に相当する

のである。アヒルにもウサギにも見える人だけが二つの見方が存在すると言うことが出来るのである。だとすれば、「神を信じる世界と神を知らない世界」という二つの世界が存在するとしても、それはアヒルやウサギが見えているという意味であって、我々がその「境界に立つ」ことの出来る様な二つの世界が存在するという意味ではない。一つの世界が様々に見えるだけなのである。勿論、どのように見えるかはその人の見方次第でどうにもでもなるとか、従って正しい見方など存在しないなどと言うつもりは全くない。アヒルにしか見えなかったものが或る時突然ウサギに変化するのであって、見方はその人の自由にはならないからであり、アヒルとウサギのどちらかにしか見えない人の見方は異常とは言えないけれども、イヌとか川とか電気にしか見えない人の見方は明らかに異常だからである。おそろく、様々に見える一つの世界が存在するということが「存在の光」に包まれていることなのである。